



コロナ禍の東京五輪に思うこと（2）

幾多の苦難を経て、なお残る課題と向き合いながらも、**TOKYO2020**が始まりました。（世界各国から参加するアスリートは、前回のリオ五輪・前々回のロンドン五輪と同規模の約11,000人）こんなコロナ禍の状況ながら、日本選手団は、大会前の予想をはるかに超える活躍を見せてくれています。

特に、金メダルの数においても1964年の東京、2004年のアテネ五輪の16個を抜き、既に史上最多を量産しています。競技別では、「お家芸の柔道」の躍進が特に目立ちますが、**日本の獲得メダル数が多かった理由**としてまず、「開催国であること」が上げられます。開催国には追加種目を提案する権利があるために、柔道でも混合団体新たに追加され、ソフトボールや野球の復活などにより、金メダルの可能性が膨らんだと考えられます。加えて、スケートボードやサーフィン、スポーツクライミングなどの「日本の若者」の間で流行しているスポーツの競技が新種目に採用されたことも大きいようです。

ところで、**柔道は金メダル9個**（男子5、女子4）を獲得し、04年アテネ五輪の8個を抜いて史上最多となり、再び強い日本柔道が復活したようです。メダル量産の裏には、12年ロンドン五輪で金メダルゼロという惨敗の反省から、国際派の井上康生監督（43）に「再建」を託し、科学的根拠に基づかない「精神主義」（現実離れした過剰な走り込みを課すなど根性論）からの脱却や、柔道界ではこれまで「動きが硬くなる」と否定論が根強かった筋力トレーニングを導入し、さらに「データ柔道」の新たな構築も功を奏したことで、強い日本柔道を取り戻すことができたと評価されているのです。

さて、**日本中が連日のメダル獲得の快挙のたびに沸き立ち**、祝福と賞賛と感動の声が広がっていますが、開催ギリギリの直前まで「五輪強行派」に対し、「命を軽視している」とマスコミによるバッシングが寄せられていました。しかしその構図も「メダルラッシュ」によって完全に「攻守逆転」した感があります（マスコミの「手のひら返し」）。思い起こせば、五輪の中止・延期を望む意見が国民の半数以上を占めていると報じられていた今年4月、IOCのコーツ副会長は「日本の選手が活躍すれば国内の世論は変わる」と自信満々で

言及していましたが、まさしく「コーツの予言」通りに世論はガラリと変わったようです。

世界中から集まり参じたオリンピックの、ひたむきに力を出し切って競技する姿に、多くの国民が理屈抜きで共感するのです。MLBでの大谷選手の活躍のニュースに心が躍るように、半端でない嬉しさを味わっているのではないのでしょうか！

